

令和4年度第1回青森市社会教育委員会議定例会議 会議概要

- 1 日 時： 令和4年5月30日（月）13時30分～14時45分
- 2 会 場： 青森市役所柳川庁舎 2階 大会議室
- 3 出席者： 棟方梢議長、石澤千鶴子委員、今別幸司委員、小笠原秀樹委員、川村隆義委員、
高橋隆子委員、滝口小百合委員、常田清彦委員、蒔苗礼子委員、米田学委員
- 事務局： 教育部長 小野正貴、教育次長 大久保綾子
- | | | |
|---------------|---|------|
| 文化学習活動推進課長 | ： | 杉山潔 |
| 参事・文化遺産課長事務取扱 | ： | 葛西俊一 |
| 中央市民センター館長 | ： | 奥崎和彦 |
| 市民図書館長 | ： | 村上泰子 |
| 指導課長 | ： | 角田毅 |
| 浪岡教育課長 | ： | 石村淳 |

4 次 第

（1）開会

（2）議題等

- ①令和4年度社会教育関係年間予定について
- ②令和4年度東青地区社会教育委員連絡協議会表彰について
- ③令和4年度青森市社会教育関係事業実施スケジュールについて

（3）その他

- ①令和4年度青森県社会教育研究大会について
- ②各委員からの社会教育に関する意見・要望等について

（4）閉会

5 主な質疑応答、意見等

（3）②各委員からの社会教育に関する意見・要望等について

・子どもたちと一緒に活動したいという気持ちがあるが、学校と連携していくことが難しい。授業の中に取り込むことで全ての子どもが社会教育を受けられるようになるのではないかと。学校にプログラムを紹介しても手を上げてくれる学校も少なく、うまく進められていない。他県では外部の人が実際に入って活動している例もあり、そこで協調性や表現力などを学んでいるので、そういったことができればと考えている。

・学校と一緒にということであれば学校運営協議会を通すと受け入れられやすかった。道徳の時間に実際にその仕事をやっている人のほうが良いと思い、子ども会の説明をしたり、一社会人としてどういう人材が必要かなどを中学校の面接の講師として学校でやらせてもらったりした。先生が教えるのと実際現場の人が教えるのは違うので、そこをもっていけばどうか。

・市Ｐ連でもねぶた祭がないので代替事業を考えているが、学校では春には年間スケジュールが決まっているので入っていくのは難しいと感じている。コミュニティ・スクールを活用するのはよいと思った。部活動クラブ化に伴い送迎などで参加できなくなったという問題も見えてきており、地域が受け皿となれば、子どもたちと一緒に盛り上げられるのではと思っているが、打開策が見つからないのが現状。

・読み聞かせや職業体験などの学校行事がなくなり、外部との接触が激減している。それは生徒のみならず、PTA にもいえることで、孤独を感じている人もいる。子どもの居場所だけでなく、保護者の居場所ということも充実するよう取り組んでいきたい。

・社会と交流する場、体験する場が減っており、コロナでさらに拍車がかかっている。社会の人たちが頑張っているのを知る機会をどう作るのか、特別に作るよりは学校と連携してやるのが必要。

かっこいい大人、肯定感を持った大人の背中を見て子どもが育つような親子関係ができないかと考えている。大鰐元気隊キッズでは東京に行き、物販や名刺交換などの疑似体験を通し、地元の良さを感じてもらい、親にも影響を与えている。そういった事例があれば良いと思う。

・学校の中に社会教育が入れば理想だが、学校にゆとりがないのが現状。しかし、コロナで中止していた行事の良さを再確認し、これから読み聞かせやねぶた代替行事に取り組んでいこうと思っている。

・市でブックスタート事業を終了したことが非常に残念であり、別の形でなにかできないか考えている。札幌市の小学校の図書室が一般開放されているのを知り、そこまでではなくともなにかできるのではと思っている。

・地域が活性化したり、大人がもっと成長したり、魅力ある大人社会があると子どもたちも自然にそこに向かっていくものと思う。学校としては地域とも関わってきていたが、コロナで中断しており、社会教育にどう学校で関わっていけるのか、委員の話を聞きながら思っていた。

・コロナもあり、家庭教育学級を実施する学校が少なくなった。学校に協力してもらえると効果も大きく、少なくなって残念に思っている。実際のお母さんたちが企画しているものなのでいいものも多く、学校でも家庭教育学級を推進してほしい。

・大学入試も変わり、今は学校内での活動ではなく、外部との活動が評価されるようになっている。社会と連携した活動ができる人が求められている。いろんな活動をちりばめておいて、子どもたちを迎える体制をつくるプラットフォームを作ることがそれぞれの居場所づくりに繋がり、救いに繋がると思う。社会教育、学校教育に加え福祉教育も融合することで地域福祉力が構築できるのではないかな。